

令和7年度 更級農業高校 学校自己評価まとめ

評価対象	評価項目	評価の観点	評価	昨年評価	成果	課題	
1	学習指導	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら学ぶ姿勢 ・授業改善 ・基礎学力の定着 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの授業において「言語活動」を意識し、対話的な学習活動に取り組んでいくことで生徒が主体的に考え学ぶ姿勢を育てていく。 ・授業評価アンケートを実施して授業改善に活かす。 	3.65	2.35	<p>生徒同士が教え合う活動やペア・グループワークを取り入れたことで、生徒の主体的・対話的な学びが進み、理解の深化やコミュニケーション力の向上が見られた。授業評価アンケートを授業改善に生かしたことで、生徒の学習意欲も高まった。さらに、基礎力診断テストや漢検などの取り組みにより基礎学力の定着や資格取得への意識が向上し、放課後の課題取組DAYでは、課題に前向きに取り組む生徒が増えるなど、学習習慣の改善につながった。</p>	<p>基学については小テストで一定の効果が見られる一方、一斉テストは目的意識を保てない生徒が多く、実施方法の再検討が必要である。学力差や意欲の差が大きく、自ら学ぶ姿勢が育ちにくい生徒も多いため、基礎学力向上の仕組みづくりと学び合いの環境整備が課題となっている。また、ICT端末の未持参や充電不足、狭い教室によるグループワークの困難さ、対話的活動が成り立ちにくいクラスが存在も授業運営の障壁となっている。さらに、学年進行に伴う生活習慣・意欲の低下や、形式化した基学テストへの形骸化など、学校全体での指導統一と継続的な改善が求められる。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・「基学」、基礎力診断テスト、各種検定の受検、読書週間など多様な取り組みにより、生徒が自ら基礎学力の伸長と教養の涵養（自分をカルチベイトすること）を意識するよう図る。 	3.29	2.06			
2	生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> ・規範意識 ・人権教育 ・自他の尊重 	<ul style="list-style-type: none"> ・規範意識（ルールを守ろうとする気持ち）の向上を働きかける機会を定期的に設けるとともに、お互いを尊重する人権感覚を育てる教育活動を行う 	3.47	2.06	<p>体育の授業では、ルールの共通理解のもとでゲームを行い、挨拶を徹底することで、互いを敬う態度や規範意識を育むことができた。日常的な挨拶や休み時間・クラブ活動でのこまめな声掛けを通して生徒との関係性が深まり、困りごとの早期把握と対応につながった。また、アンケートの実施や職員・SCとの連携を図ることで、生徒が円滑な人間関係を築くことができる力を身につけるため、教員・生徒相互に挨拶や礼儀を重んじるとともに、連絡相談など日常的に細やかなコミュニケーションができるような雰囲気醸成していく。</p>	<p>校則や生活指導の基準が学校全体で統一されておらず、身だしなみ指導やルールの徹底が不十分なため、担任が生徒に寄り添いにくい状況が生まれている。また、規範意識・人権感覚は定着しにくく、継続的な指導が必要である。発達や特性への理解を要する生徒が増えている一方で、教職員側の知識や対応力のアップデートが追いつかず、組織的な支援体制の強化が求められる。さらに、職員間で規則や指導方針の共有が進まず、生徒対応が個別化・属人的になっている点も課題であり、学校全体での共通理解と早急な改善が必要である。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が円滑な人間関係を築くことができる力を身につけるため、教員・生徒相互に挨拶や礼儀を重んじるとともに、連絡相談など日常的に細やかなコミュニケーションができるような雰囲気醸成していく。 	3.29	2.12			
3	キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導 ・自己指導能力の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育への取り組みを進め、生徒が自らの未来について考え、将来、社会の中で主体的に生きていくことができるよう図る。 	3.47	2.59	<p>学年会や外部講師による進路ガイダンス、企業説明会、進路係と担任による個人面談を繰り返し実施したことで、生徒が早期から進路を考える機会が増え、進路意識の向上につながった。就職希望者に対しては職場見学や就業体験、専門機関との連携を通して適性理解が進み、希望する進路の実現に結びついた。進路行事全体が充実し、生徒が主体的に進路選択へ取り組む姿勢が育まれた。</p>	<p>生徒が主体的に進路を考えるための自己理解・自己分析が十分ではなく、基礎学力や学習習慣の定着も課題となっている。また、進路講演会等で主体的に参加できない生徒もおり、進路を自分事として捉えられていない点が課題である。就職試験での苦戦や進学後の早期離脱も見られ、進路選択の質を高めるための支援体制の見直しが必要である。困難を抱える生徒に対する組織的支援の強化、3年間を通じたキャリア教育の体系化、社会の変化に対応できる力を育成する取り組みの充実が求められる。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・卒業時の進路決定を見据えた取り組みを1年次より段階的に行い、意識を高めるとともに、進学・就職に必要な学力の育成に努める。 	2.94	2.12			
4	社会に開かれた教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携 ・地域資源の教材化 ・自主活動（生徒会・クラブ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源に着目した教育活動や各種交流活動に取り組み、地域とのつながりを意識した活動を行い、将来、地域のために貢献できる人材の育成に努める。 	3.12	2.65	<p>合同チームでの部活動参加や地域活動への協力を通じて、生徒は自主性や社会性を高めることができた。特に、地域の農業や環境保全に関わる実践は貢献意識と誇りの醸成につながった。また、生徒会や課外活動への積極的な参加により、地域理解が深まり、人との関わりを学ぶ機会も広がった。加えて、定期的な個別面談や情報提供を行うことで、生徒の状況把握と支援が円滑に進み、充実した学校生活の実現に寄与した。</p>	<p>生徒会やクラブ活動を通じて自発性を育む仕組みが十分に整っておらず、活動の継続や後継者育成が難しい状況にある。また、クラブへの参加率も低く、多くの生徒が三年間で打ち込める経験を持っていないことが課題となっている。地域連携についても、生徒の意識や参加が限定的であり、「地域とともに学ぶ」姿勢を育てる取り組みの強化が求められる。さらに、教職員の働き方や生徒数減少の中で、部活動・課外活動を地域と協働して運営する方策の早急な検討が必要である。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会・農業クラブ及び課外クラブ活動への生徒の自発的な参加と主体的な活動に取り組むように促す。 	3.12	2.53			

評価対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	
5	農業教育	1年 (基礎教育)	農業科の基礎科目の学習を通して、2年進級次のコース選択において興味関心を持ち主体的な選択ができるよう指導する。	農業の基礎だけでなく、実習に取り組む姿勢や実習服の着方等基本的な部分もしっかり教育されているため、2年生の授業で実習を行う時にスムーズに始めることができています。 コース選択については、もっと内容を知って体験してから選択できるように、今年度からの総合実習で6コースローテーション体験授業を実施した。生徒自身がコースの内容を理解して選択することができた。
		A 生産技術	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指す。	Aコースの生徒は、様々な活動に参加する機会を得ており、多くの経験を積んでいる。作物を教材とした新たな生産技術の探究に成果を得た。資格取得や技能習得にも積極的に取り組み、多くの生徒が資格取得に自信を深めた。姨捨の棚田の環境と景観の保全に関する意欲的な活動や研究を行い、地域との関係・交流、課題解決も広がっている。進路については、自己の適性や可能性を探り、全員が目指す進路希望を実現した。
		B 流通経済	野菜やコメなどの栽培を通して、播種、育苗、管理から収穫までの基本的な栽培技術の習得を行う。あわせて農産物の生産から販売、価格決定までの流通の仕組みについて学習する。また、簿記能力検定2級(全国経理教育協会主催)を目標に簿記について学習する。	3年生は研究発表会において、最近のコメについて調査を行い、米価の候というに伴う古米や古古米の流通に関連し、古米などの味の変化と変化に対応したおいしく食べる方法、また、お米の品種改良の傾向などを調査研究の成果をまとめ、わかりやすく発表した。 2年生は全経簿記検定3級に挑戦し、8割の生徒が合格した。さらに、2級に挑戦する生徒し、1/3の生徒が合格した。また、税に関する高校生の作文に取り組み、入賞を果たした。 農産物の生産では、ジャガイモ、トウモロコシ、ハクサイ、大根など基本的な野菜を中心に行い、収穫祭の豚汁に必要な食材の多くを提供するなど、栽培から管理、収穫までコース2年、3年の全員が熱心に取り組んだ。
		C 食品科学	食品の成分分析ならびに食品加工技術を学ぶとともに、地域の農産物を生かした加工品の開発などを目指し、食品関連産業に貢献できる人材を育成する。	生徒が製造した加工品を食べてみたいという声が多数聞かれた。市販品ではないオリジナルの製品にこだわる姿勢が素晴らしいと感じる。 2年生は、食品化学、食品製造、微生物の基礎を習得しながらレポート作成に取り組み、まとめる力を身につけた。3年生は学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で新たな加工品の開発や食品成分分析に探究的に取り組み、成果を発表した。文化祭やイベントでは、地域の方々へ加工品を販売する機会を得た。 進路については、食品関連産業へ就職する生徒もおり、今後も地域に貢献できる人材の育成に努める。
		D 環境科学	身近な環境についての各種調査・研究活動を意欲的に取り組むと同時に、その成果をもとに信州の環境の実態やこれからの農業についての自分たちの考えを様々な機会に発信し、地域の環境や農業を守る人材を育成する。	2年生は、環境科学、食品製造、食品化学を習得する中で、トマトジュースの原材料である加工トマトを鶏糞などを用いて環境に配慮した栽培を行い、レポートにまとめた。3年生は学んだ知識・技術を応用し、竹林を活用するためにタケノコの水煮をつくる研究や根粒菌を生かした作物の栽培、有用微生物が多く含まれているえひめAIを利用した環境に配慮した栽培研究に取り組んだ。進路については、食品・環境分野に限らず、多方面へ就職・進学している。
		E アグリネットワーク	栽培基礎的な学習とその利用について考え、農業の楽しさ・食の大切さなどを地域に発信するための「農業」「園芸」を活かした交流活動を考えて実践する。活動を通して地域と社会に貢献する意識と、自らのコミュニケーション能力を向上させ、卒業後も多方面において活躍できる力を養う。	多くの交流を重ね、生徒のコミュニケーション能力を向上させることができた。 特に3年生は親子ふれあい農業塾や篠ノ井幼稚園との交流など10回ほどあったため、最初の頃に感じた課題を次の交流に活かすことができコミュニケーション能力の向上と課題発見・解決能力を身に付けることができた。 2年生は、地域資源活用の座学やグループワーク、調べ学習を通して長野県や長野市の地域資源について考えることができた。特に、3学期に作成した「長野県かるた」では、全ての市町村のかるたづくりのために地域資源を調べまとめることができた。来年度は、この学習を活かして地域に求められる交流に繋げていきたい。
		F 園芸デザイン	草花の栽培管理の知識・技術を身につけ、それらを生かした地域交流や販売活動を実践する。地域との連携を経験することでコミュニケーション能力を養成し、地域貢献できる人材を育成する。	本校で管理している植物に関して、栽培管理・技術に関し、ある程度身につけることができた。特にシクラメンは、2年生時の播種から栽培管理、販売実習まで通じて学習ができた。地域との連携に関しても善光寺花回廊から、篠ノ井病院、篠ノ井駅前の植栽交流を経験し、コミュニケーションや地域貢献についてもさらに学ばせたい。
		G 施設野菜	野菜栽培の技術・知識の習得や、新しく導入した水耕栽培やコバック栽培の施設で情報通信技術(ICT)を活用したスマート農業を理解する。地域農業と生産現場の担い手となるスペシャリスト養成と、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目標とする。	小森ナスについて地域の中で抱えている課題を知り、その解決策を考え実践することで地域の活性化へ貢献した。また、各種発表会を通じて活動発信にも努めた。 コバック栽培や水耕栽培では、栽培技術のノウハウが乏しく、高い生産を実現することができなかった。今後は、研修参加やデータ収集などをおこない、農産物の質と量の向上を目指したい。
H 果樹科学	果樹の栽培管理を通じて、知識・技術ならびに態度を身につけ、地域産業の担い手を育成するとともに、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目指す。	今年度の果樹栽培学習では、基礎的な知識と技術の習得を目指して実施された。2年生はモモの栽培調査を行い、3年生はモモとブドウの省力化栽培方法や高品質化栽培の研究を続けた。また、校内ではわい化リンゴ樹の竹チップ敷料利用による果実品質調査や鳥害対策にも取り組んだ。新たな地域ブランドの創造、モモのJGAP認証取得に向けての取り組み及び篠ノ井幼稚園との果物を使った交流などの課題研究に取り組んだ。地域農業への貢献を目指し、地域密着型の活動再開が望まれ、栽培規模の見直しや適正な管理が検討されている。今年度、生徒は地域で果樹生産物の振興、地域産業の担い手育成に貢献した。食糧需給率の低さを教科内で学びながら、この活動の重要性を実感した。		